TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　880語

Why the Water in Rivers is never Still

どうして川の水はじっとしていないの？

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：Raybrite

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　むかし、子どものおもりは川や小川の仕事でした。王さまのふたりのむすこをまかされた川たちですが、ある暑い日……。



All kinds of strange things came to pass in the days of long ago, but perhaps the strangest of all was that the nurses who cared for little children were not women, but brooks and rivers. The children and the brooks ran about together, and the brooks and rivers never said, "It is time to go to bed," for they liked to play as well as the children, and perhaps a little better. Sometimes the brooks ran first and the children followed. Sometimes the children ran first and the brooks followed. Of course, if any animal came near that would hurt the children, the brook or river in whose care they were left flowed quickly around them, so that they stood on an island and were safe from all harm.

Two little boys lived in those days who were sons of the king. When the children were old enough to run about, the king called the rivers and brooks to come

before him. They came gladly, for they felt sure that something pleasant would happen, and they waited so quietly that no one would have thought they were so full of frolic.

"I have called you," said the king, "to give you the care of my two little sons. They like so well to run about that one nurse will not be enough to care for them, and of course it will be pleasanter for them to have many playmates. So I felt that it would be better to ask every river and every brook to see that they are not hurt or lost."

"We shall have the king's sons for our playmates!" whispered the rivers. "Nothing so pleasant ever happened to us before."

But the king went on, "If you keep my boys safely and well, and follow them so closely that they are not lost, then I will give you whatever gift you wish; but if I find that you have forgotten them one moment and they are lost or hurt, then you will be punished as no river was ever punished before."

The rivers and even the most frolicsome little brooks were again quiet for a moment. Then they all cried together, "O king, we will be good. There were never better nurses than we will be to your sons."

At first all went well, and the playmates had the merriest times that could be thought of. Then came a day when the sunshine was very warm, but the boys ran faster and farther than boys had ever run in the world before, and even the brooks could not keep up with them. The rivers had never been weary before, but when this warm day came, one river after another had some reason for being quiet. One complained, "I have followed the boys farther than any other river." "Perhaps you have," said another, "but I have been up and down and round and round till I have forgotten how it seems to be quiet." Another declared, "I have run about long enough, and I shall run no more." A little brook said, "If I were a great river, perhaps I could run farther," and a great river replied, "If I were a little brook, of course I could run farther."

So they talked, and the day passed. Night came before they knew it, and they could not find the boys.

"Where are my sons?" cried the king.

"Indeed, we do not know," answered the brooks and rivers in great fear, and each one looked at the others.

"You have lost my children," said the king, "and if you do not find them, you shall be punished. Go and search for them."

"Please help us," the rivers begged of the trees and plants, and everything that had life began to search for the lost boys. "Perhaps they are under ground," thought the trees, and they sent their roots down into the earth. "Perhaps they are in the east," cried one animal, and he went to the east. "They may be on the mountain," said one plant, and so it climbed to the very top of the mountain. "They may be in the village," said another, and so that one crept up close to the homes of men.

Many years passed. The king was almost broken-hearted, but he knew it was of no use to search longer, so he called very sadly, "Search no longer. Let each plant and animal make its home where it is. The little plant that has crept up the mountain shall live on the mountain top, and the roots of the trees shall stay under ground. The rivers"—Then the king stopped, and the rivers trembled. They knew that they would be punished, but what would the punishment be? The king looked at them. "As for you, rivers and brooks," he declared, "it was your work to watch my boys. The plants and trees shall find rest and live happily in their homes, but you shall ever search for my lost boys, and you shall never have a home."

So from that day to this the rivers have gone on looking for the lost children. They never stop, and some of them are so troubled that they flow first one way and then the other.

むかしは、ふしぎなことがいろいろおこりましたが、いちばんふしぎだったのは、小さな子どものおもりをするのが女の人ではなく、小川や大きな川だったことかもしれません。子どもたちと小川はいっしょにかけまわりました。小川や川は「もうねる時間ですよ」とは言いませんでした。小川や川も子どもたちと同じくらい、いいえ、もしかするとそれ以上に遊ぶのが好きだったからです。小川が先に走って、子どもたちがついていくこともありました。子どもたちが先に走って、小川がついていくこともありました。もちろん、子どもたちをきずつけるような動物が近づいてきたら、子どもたちをまかされている小川や川は、すばやく子どもたちのまわりを流れました。そうすると子どもたちは島の上に立っていることになり、何からもあぶない目にあわずにすんだのです。

そのころ、王さまのむすこである小さな男の子がふたりいました。子どもたちが走りまわれるほど大きくなると、王さまは川や小川を自分の前によびよせました。川たちは、何か楽しいことがあるにちがいないと思って、よろこんでやってきました。そして、とてもしずかに待っていたので、あんなにふざけるのが好きだとは、だれも思わなかったでしょう。

「おまえたちをよんだのは」と王さまは言いました。「わたしのふたりの小さなむすこのおもりをたのむためだ。ふたりは走りまわるのがとても好きなので、おもりがひとりではたりない。それに、もちろん遊び友だちがたくさんいたほうが、ふたりも楽しいだろう。そこで、すべての川とすべての小川に、ふたりがけがをしたりまいごになったりしないよう、気をつけてもらうのがいいと思ったのだ。」

「王さまのむすこたちが、遊び友だちになるんだって！」と川たちはささやきました。「こんなに楽しいことは、今まで一度もなかったよ。」

けれども王さまはつづけました。「もし、むすこたちをしっかりまもり、まいごにならないようにぴったりついていてくれたら、おまえたちがほしいものを何でもあげよう。でも、ほんのいっときでもふたりのことをわすれて、まいごにしたり、けがをさせたりしたら、どんな川もうけたことのないようなばつをあたえるぞ。」

川たちも、いちばんふざけるのが好きな小川たちも、またいっときしずかになりました。それから、みんなでいっせいにさけびました。「王さま、わたしたちはちゃんとやります。わたしたちほどよいおもりは、ほかにいないでしょう。」

はじめはすべてうまくいって、遊び友だちはみんな、考えられるかぎり楽しい時をすごしました。ところがある日、日ざしがとても暑かったのに、男の子たちは、世界じゅうのどんな男の子よりも早く、遠くまで走っていったので、小川たちでさえついていけなくなりました。川たちは、それまでつかれたことなどありませんでしたが、その暑い日には、川がつぎつぎに、なんだかんだとわけを言ってじっとしていました。ある川はもんくを言いました。「わたしは、ほかのどの川よりも遠くまで、男の子たちについていったんだ。」「そうかもしれないね」とべつの川が言いました。「でも、わたしはあっちへこっちへ、ぐるぐるまわりつづけて、じっとしているのがどんなだったか、わすれてしまったよ。」べつの川は言いきりました。「もう十分走りまわったから、これ以上は走らないよ。」小さな小川は言いました。「ぼくが大きな川だったら、

もっと遠くまで走れたかもしれないのに。」すると大きな川が答えました。「わたしが小さな小川だったら、もちろんもっと遠くまで走れたのにね。」

そんなふうに話しているうちに、一日がすぎてしまいました。気がつくと夜になっていて、川たちは男の子たちを見つけられませんでした。

「むすこたちはどこだ？」と王さまはさけびました。

「本当に、わかりません」と小川や川はたいへんこわがって答え、みんなおたがいの顔を見あわせました。

「おまえたちは、わたしの子どもたちをまいごにした」と王さまは言いました。「見つけられなければ、ばつをあたえるぞ。さがしに行け。」

「どうかてつだってください」と川たちは木や草花にたのみました。そして、いのちあるものはみんな、まいごの男の子たちをさがしはじめました。「地面の下にいるのかもしれない」と木々は考えて、根っこを土の中へのばしました。「東にいるのかもしれない」とある動物がさけんで、東へ行きました。「山にいるのかもしれない」とある草が言って、山のてっぺんまでのぼっていきました。「村にいるのかもしれない」とべつの草が言って、人の家のすぐそばまではいよっていきました。

何年もたちました。王さまは、むねがはりさけそうでしたが、これ以上さがしてもむだだとわかっていたので、とてもかなしそうによびかけました。「もうさがさなくてよい。草も動物も、それぞれ今いるところをすみかにするがよい。山にのぼった小さな草は山のてっぺんにすみ、木の根は地面の下にいるがよい。川たちは――」そこで王さまは言葉を止め、川たちはふるえました。ばつをうけることはわかっていましたが、どんなばつなのでしょう。王さまは川たちを見ました。「川と小川よ、おまえたちは」と王さまは言いわたしました。「むすこたちを見まもるのがおまえたちの仕事だった。草や木は休んで、自分のすみかで幸せにくらしてよい。だが、おまえたちはいつまでもまいごのむすこたちをさがしつづけ、けっしてすみかをもつことはないのだ。」

こうして、その日から今まで、川はまいごの子どもたちをさがしつづけているのです。川はけっして止まりません。中には、こまりはてて、あっちへ流れたりこっちへ流れたりする川もあるのです。

たんご と クイズ　どうして川の水はじっとしていないの？

brooks 小川	**rivers** 川	**island** 島
roots 根っこ	**mountain** 山	**village** 村
nurses おもりをする人		

Q1 むかし、小さな子どものおもりをしていたのは？

① 小川や川　② 女の人　③ 鳥たち

Q2 男の子たちがいなくなったのは、どんな日？

① 雪の日　② とても暑い日　③ 雨の日

Q3 王さまが川にあたえたばつは？

① こおってしまう　② 山にのぼる　③ いつまでもさがしつづける

こたえ

Q1 ①　むかしは、子どものおもりをするのが女の人ではなく、小川や川で、いっしょにかけまわって遊びました。

Q2 ②　日ざしがとても暑い日に、男の子たちは遠くまで走っていき、川はついていけませんでした。

Q3 ③　川はすみかをもたず、いつまでもまいごのむすこたちをさがしつづけることになりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Raybrite（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。